特集「日中関係の井戸を掘った人々」第４回

たたき上げの商売人・高碕達之助

朝日新聞記者　牧村健一郎

私が高碕達之助という人物に興味を持ったのは、４、５年前、勤務している朝日新聞社で、昭和の新聞報道、とくに朝日の報道を、自分たちの手で見直そうという企画「検証　昭和報道」というチームに入ったのがきっかけでした。

あまり知られていない、あるいは知られていても中身がよくわからない事柄を取り上げようと、戦前・戦中は「大東亜会議」（東京、１９４３年）を、戦後は「アジア・アフリカ会議（バンドン会議）」（インドネシア・バンドン、１９５５年）を調べ、新聞に連載しました。バンドン会議については、現地まで行って取材しました。そのバンドン会議の日本政府首席代表が、高碕だったのです。

この会議で高碕は外務省の筋書きを超えて活躍し、中国の周恩来首相、インドのネルー首相、エジプトのナセル首相らアジア・アフリカの新しいリーダーと親交を結び、戦後日本のアジア外交の扉を開きました。とくに、周恩来との出会いは、のちに日中ＬＴ貿易（半官半民の日中間の長期貿易協定、１９６２年）に結びつき、１９７２年の日中国交回復へ至ります。日中の「井戸を掘った人」の一人として、よく知られます。バンドンで高碕・周の通訳をした元外交官がまだご存命で、話が聞けたのが、たいへんラッキーでした。

調べていくうち、高碕は日中の橋渡し役としてだけでなく、昭和史のさまざまな局面で活躍し、人となりも破格・破天荒、実に魅力的な人物とわかりました。

最近、知る人も少なくなったので、あらためて生涯を調べ直し、評伝（『日中をひらいた男　高碕達之助』朝日新聞出版）を書くことになったのです。

■プロフィール

高碕は１８８５年（明治18年）現在の大阪高槻市柱本、淀川べりの豊かな農家で生まれました。府立４中（現茨木高校、のちに川端康成、大宅壮一が卒業）を経て、東京・越中島の農商務省水産講習所（のちの東京水産大学、現在は東京海洋大学）に学びます。

日露戦争の時期でした。日本の勝利後、ポーツマス条約が結ばれますが、これに反発した民衆の日比谷公園焼き打ち暴動

が知られています。政府は、日本の国力が尽きていたため、講和を結んだのですが、実情を知らされていなかった国民が暴発した事件でした。若き高碕も、この暴動に参加し、ポリスボックスを破壊して、警察に捕まる経験もしています。後年の高碕では考えられない行動ですが、あの当時は日本全体が大興奮状態だったのでしょう。高碕は晩年、日米安保条約反対のデモに接し、若かりしころの日比谷暴動を思い出しています。

卒業後、三重県の水産会社を経て、単身アメリカに渡り、メキシコの水産会社で技師として働き、カリフォルニア半島の孤島に暮らします。ちょうど日本移民排斥の時期で、高碕も日本海軍のスパイと疑われますが、旧知のスタンフォード大学学長に助けられ、窮地を脱します。そのおり、学長からの紹介で若い鉱山技師と知り合います。ハーバート・フーバーというその若者は、その後政界に進出、大統領にまで大出世します。高碕は親交を結び、ホワイトハウスに彼を訪ねています。高碕の対米人脈のキーマンです。

帰国後、大阪で製缶会社の東洋製罐を創業（１９１５年）、みるみる業績を伸ばし、関西財界の若手ホープと目されます。昭和に入り、彼に目を付けたのが、新興財閥の主、鮎川義介で、日産グループを満州に移して満州重工業（満業）を起こした鮎川は、高碕を口説いて満業の副総裁に就かせ（のちに総裁）、高碕は満州の首都、新京（現長春）に住みます。

敗戦（１９４５年８月）は新京で迎えます。ソ連軍が満州を侵攻、極度に治安は悪化し、日本人社会は不安を募らせる中、高碕は日本人会の会長に推され、在満州日本人の最高指導者の役割を担います。関東軍や満州国政府首脳は逮捕、連行されたため、民間人が矢面に立たざるを得なかったのです。高碕はソ連軍司令官に対し、治安維持、生命財産の保証など、敗者側の責任者として交渉します。ソ連、中華民国軍、共産党軍と占領軍は次々に変わり、そのつど、高碕は混乱を避け、治安をまもるため、占領軍に協力を約束、そのため新たな支配者から逮捕・拘留の危機に瀕しますが、高碕なくして満州の重工業復活が不可能と知ると、占領軍はむしろ利用しようと手を出しません。１００万を超す満州からの日本人引き揚げ事業の日本側総責任者も高碕でした。

１９４７年11月にその年の最後の引き揚げ船で佐世保に帰国します。私は昨年、引き揚げ地の佐世保・浦頭（うらがしら）港に行ってみました。小さな港の一角に、引き揚げ記念の碑が立ち、丘の上に記念館があり、当時の服やリュック、ＤＤＴを頭から浴びせられる引き揚げ者の写真などが展示されていました。港からしばらくのぼったところに、当時、厚生省援護局の建物群があり、高碕はじめ引き揚げ者はここで検疫や故郷に帰る準備のため数日を過ごし、近くの国鉄・南風崎（はえのさき）駅から列車で帰郷したのでした。

私がここでもっとも驚いたのは、この援護局の建物があったところ、命からがら引き揚げてきた人たちが日本の第一歩

南風崎駅

を踏んだその地がいま、テーマパークとして知られるハウステンボスに生まれ変わっていたことでした。このあたりは引き揚げ事業が終わると長年、荒れ地でしたが、昭和の末、中世オランダの街並みを再現するしゃれた建物が次々に建てられ、ハウステンボスとして、大観光地に変貌したのです。かつて引き揚げ者が乗り込んだ南風崎駅のホームからは、すぐ向こうにハウステンボスのホテルが見えます。隣駅のハウステンボス駅（ハウステンボスができて新設された）に立ち寄ると、待合室でガイドブックを手にした中国人の若い観光客らが談笑していました。時代の変化を感じさせる光景でした。

さて、帰国した高碕は、しばらく本職の製缶事業を経営していましたが、国策会社の電源開発会社の総裁に就任、アメリカの近代的な土木技術を導入して巨大な水力発電ダム・佐久間ダム（静岡・愛知両県境）の建設を推進、事業家としての手腕をみせます。戦後の電力不足の切り札として期待されたダムでした。

長年続いた吉田内閣を倒した鳩山一郎首相に、経済審議庁（のちの経済企画庁）長官になるよう言われたのは１９５４年12月でした。翌年１月の総選挙に出馬、当選、70歳の新人代議士です。４月、バンドン会議に日本政府代表として出席します。

その後、岸内閣の通産大臣を経て、60年春に訪ソし、フルシチョフと北洋安全操業を交渉し、秋には訪中して周恩来首相と再会、旧満州を視察旅行します。フルシチョフと周にサシで会える日本人は高碕くらいだったでしょう。

この間、元電発総裁として、岐阜県荘川村の御母衣ダム湖に沈むはずだった老桜を高台に移植し、生まれ代わらせます。桜ファンによく知られる「荘川桜」です。

62年、北京でＬＴ貿易協定に調印します。Ｌは中国側の責任者・廖承志の頭文字、Ｔはもちろん高碕のＴです。翌年、北海道・根室半島沖の貝殻島周辺で、日本の零細漁民がコンブ漁を安全にできるようにする協定がソ連と結ばれます。長年、高碕が交渉してきた「貝殻島の安全操業問題」がようやく解決したのです。

私は現地を見るために、昨春、根室・納沙布を訪れました。半島突端の納沙布岬灯台のすぐ近くに、高さ５㍍もあろうかという高碕の顕彰碑が立っていました。地元の漁民が安全操業を可能にした高碕への恩を忘れないようにと、建てた碑です。地元漁協の専務に会いました。毎年６月、今でも、コンブ漁が解禁になる日の前日、漁民に許可証を渡すセレモニーを、高碕の大きな肖像写真を飾った漁協の講堂でするそうです。数年前までは毎年、灯台わきの高碕顕彰碑の前で、セレモニーをしていましたが、強風が吹き、寒いので、現在は漁協講堂で行っています。ここでは高碕は決して過去の人ではない、と強く感じました。

根室・納沙布岬灯台わきの高碕顕彰碑

高碕が胃がんで亡くなったのは64年２月です。79歳でした。この年の秋、東京オリンピックが開かれています。そう考えると、さほど昔の人でもない、という気もします。

■幅広い活動域

高碕は日本近代史そのものを歩んできた男、とくに昭和史に大きな足跡を残した人物でした。忘れ去られるのは惜しいと思います。

彼の業績を挙げるとすれば、第1に、62年11月にLT貿易の協定をまとめたことでしょう。中華民国（台湾）を承認していた当時の日本にあって、巨大な中国大陸の重要性を認識し、台湾ロビー、右翼からの妨害、嫌がらせを押し切って、半官半民という事実上の政府お墨付きで貿易の窓口を開いた高碕の先見性は高く評価されてしかるべきでしょう。なにしろ大陸は、原料輸入と工業製品の輸出の場として、日本にとってなくてはならない、最大の隣国なのですから。

62年秋は世界が震撼した時期でした。キューバ危機が起こり、核戦争が現実味を帯びました。中国とインドの間で紛争が勃発し、バンドン会議の理想主義が吹き飛びました。バンドンの2大ヒーロー、周とネルーが角突き合わせたのです。周は刻々と変わる世界情勢を分析し、判断しつつ、高碕と会談し、高碕も世界を見ながら日中交流を進めたのでした。

その後、文革などの影響で日中関係が悪化した時期は、このLT貿易と、その後継としての覚書貿易協定が日中を結ぶ唯一のラインとして機能し、72年の国交回復につなげました。

2番目は、納沙布岬沖・貝殻島のコンブ漁安全操業を実現させたことでしょう。日ソ間最大の懸案である北方領土問題と直接からむため、きわめて難しい問題でした。さきほど述べたように、現地には高碕の顕彰碑があり、いまも尊敬されています。

もともと高碕は、水産講習所出身の罐詰屋ですから、北洋の漁業にはいろいろな関係がありましたが、コンブ漁には縁が薄かったようです。大日本水産会会長として現地を視察し、零細漁民の苦渋を知り、初めてなんとしてでも安全操業をまとめなければと誓ったといいます。一家の担い手である父や息子が、ソ連船に拿捕され、半年も1年も帰ってこない事態は、満州からの引き揚げ体験者である高碕にとって、他人事ではなかったのです。

ソ連の駐日大使を自宅に呼んで、零細漁民の苦しみを訴えました。さらにはフルシチョフ、ミコヤンら首脳にも会える立場でしたので、トップにも善処を要望しました。ただこの問題は、領土問題が絡みます。貝殻島は納沙布岬のすぐ先ですが、ソ連が実効支配し、日本が固有の領土とする北方4島に属し、この島に近づくと、ソ連の警備艇が拿捕にくるのです。原則論を唱える外務省としては、タッチしてほしくない問題で、高碕は日本の外務省ともすりあわせが必要でした。「魚と領土を交換するな」「売国奴」などと右翼が自宅におしかけ、無言電話などの嫌がらせが続きました。

結局、領土問題には触れず、政府とは違う立場の大日本水産会が漁業者に許可証を出し、ソ連側に入漁料を払うかたちでまとまりました。ソ連はコンブを利用しないので、コンブを採取されても痛くもかゆくもないのですが、むこうも、原則論でつっぱってきます。ソ連からすれば、入漁料を取ることは、間接的に領土として認めさせたという理屈になるのでしょう。高碕は両方の顔をたてつつ、困難な交渉をまとめ上げ、零細漁業者のために実際的な解決をもたらしたのです。実務家の高碕ならではの業績でした。

3番目としては、敗戦後の満州で、在留日本人の指導者として治安維持や引き揚げ事業をまとめたことでしょう。次々にかわる占領軍に協力したことで、一部

の日本人から「裏切者」などと批判されただけでなく、新たな支配者からは、旧支配者の協力者として「銃殺」の危機もありました。

ダム湖に沈むはずだった桜を移植した「荘川桜」の保存も、忘れられない業績です。財界・経済人の高碕は、あくまで利益追求の実務家でしたが、苦労人だけあって人情の機微に通じ、決して「世の中、カネがすべて」とは思っていませんでした。

ダム建設で消滅する集落の記憶を刻む桜の移植、保存は、「地元対策」を超えて地域の人々の心に訴えました。ちょうど、東日本大震災で唯一残った、気仙沼の「奇跡の一本松」と同じです。荘川の人たちは高碕死後も、一周忌、三周忌、七周忌と現地で法事を続け、高碕を慕いました。

昨年秋、この「荘川桜」を見てきました。高山から車で1時間ほど、御母衣ダム湖のほとりに、樹齢500年といわれる2本の老桜があります。数日前の台風でかなり枝折れしていましたが、枝には緑の葉がダム湖を渡る風に揺れ、まだ立派に生きていました。

高碕・周恩来会談

移植の物語は映画にもなり、「荘川桜」は毎年、5月の連休ころに咲くので、そのころは多くの観光客が訪れます。近くの白川郷がユネスコの世界遺産に指定されてからは、そのついでに寄る人も多いそうです。高碕の名は、今では、「荘川桜」の保存で最も知られているかもしれません。

■たたき上げの商売人

高碕はたたき上げの商売人でした。学歴や学閥とは無縁であり、国家・政府の後ろ盾がない、自前の人間であり、独歩の大阪商人でした。だからでしょう、日本人に珍しく、修羅場に強いのです。決められたレールを走る秀才官僚、マニュアルに忠実な優等生とは違う、臨機応変の度胸がありました。敗戦後の満州で、敗者としてソ連軍と交渉した際の堂々とした態度は、打ちひしがれた在満州の同胞にとって、頼もしかったといいます。

商売人ですからイデオロギーや理念とは無縁です。中国との関係改善でも、たがいにウインウインの関係になることを目指しました。むろん、戦中戦前の日本の大陸政策、中国侵略を反省し、とくに満業総裁として満州開発の先頭に立った事実もあり、しばしば謝罪の意を表明していますが、根本のところは、ギブアンドテイクでいこう、ということだったと思います。同文同種意識、アジア主義的な思想も希薄でした。

高碕の異母弟にあたる方と、数年前、大阪・高槻でお会いしました。90歳を越してもお元気で、写真で見る高碕とそっくりのお顔でした。その方が言うには、兄である高碕は「太いもうけをする商売人や」ということでした。目先のことより、将来の大きい商売を見据える人物ということでしょう。日中のLT貿易はまさに、そうした大局観から生まれた業績でした。

そういえば、バンドン会議でも、こんなことがありました。

会議の合間に、アジア・アフリカの若い指導者に日本製の精巧なカメラや時計をプレゼントしておおいに喜ばれたとい

うのです。アジアはともかく、アフリカ諸国の政治家にとって、極東の日本ははるかに遠い国です。しかも戦争に負けてまだ10年です。その極東の小さな島国が、こんな素晴らしい工業製品を生産するまでに復興した、と驚いたに違いなく、日本への認識を変えたのです。大使を交換したいという申し出が続いたといいます。まずエサをまき、後でおおきく回収する。高碕ならではの作戦でしょう。

複眼的視野も、高碕の大きな特徴でした。

高碕はＬＴ貿易やソ連との漁業交渉で知られ、アジア外交家とみられがちですが、実はアメリカとの関係の方がはるかに長く、深いのです。アメリカ通ということが、対中国、対ソ連との交渉で大きな武器になっています。当時の日本の政治家、経済人はおおむねドメスティックでしたが、その点、高碕は20代から国際人でした。

アメリカには大物キーマンがいました。戦前については先にもお話ししたフーバー大統領であり、戦後は、民主党院内総務を務め、のちに下院議長になったマコーミック議員です。

満州から帰国して製缶業に復帰してしばらくした１９５０年ころ、高碕は罐詰の関税の問題で渡米、民主党の有力議員マコーミックに面会します。率直に日本の窮状を訴えると、マコーミックは「ドント　ワリー　タカサキ」と胸をたたき、日本製罐詰に高い関税をかける法案を審議未了にしてくれました。これをきっかけに、二人は親しくなります。

民主党の若いケネディ上院議員が大統領に選ばれ、１９６１年、ワシントンで就任式がありました。あの有名な「自分たちのために国が何かしてくれることを望まず、自分たちは国に何ができるかを考えていただきたい」という演説があったときです。高碕はマコーミックに招かれ、就任式に出席します。一緒に連れて行ったのが、若手のホープ・中曽根康弘議員でした。

私は数年前、中曽根さんにお目にかかり、高碕の思い出を語ってもらいました。中曽根さんは高碕を政治の師として、尊敬しています。訪米の飛行機の中で、高碕はこう言ったといいます。「俺たちは東洋の道徳で行こう。中国ではアメリカの悪口は言わない、アメリカでは中国を悪く言わない」と。以前、北京で社会党の浅沼稲次郎書記長（当時）が「アメリカ帝国主義は日中両国共通の敵」と発言したのを、踏まえていたのです。相手に迎合しないぞ、ということでしょう。

中曽根さんによると、高碕はワシントンのホテルで、周恩来にあてて、リンカーンか何かの絵葉書を出したといいます。「アメリカも中国も呑んでいると驚いたよ」と語ってくれました。「首脳外交は人間のスケールがものをいう。相手もプロだから、そこを見る。首相として各国首脳と会談したが、高碕さんの姿勢、風格を受け継ぐという意識だった」と中曽根さんは言っていました。なお、私は『日中をひらいた男』を刊行すると、すぐに中曽根さんにお送りしましたが、直後に本人から、ありがたく受け取った、読みます、というお便りをいただきました。高碕への敬愛の気持ちは格別なのだ、と感じました。

アメリカでは、連邦議会の食堂で有力議員を集めて中国問題を話し合っています。マコーミックの差配です。当時アメリカは共産中国への猜疑心が強く、情報も限られていました。高碕から最新の中国情報を知りたかったでしょうし、一方、高碕は地政学的に日本は中国大陸ぬきにはやってはいけないのだ、として、政経分離のかたちで中国と貿易・経済交流を進めることに理解を求めたのでした。日本の政治家はともすると、密室での会談

や、あうんの呼吸で物事を進めますが、高碕のスタイルはオープンで、堂々としています。また、中国に関する米有力議員の意向、空気を知ったことは、周との会談でものをいったはずです。周もアメリカの最新の情報、空気を知りたかったのです。

もう一つの複眼的視野は、彼が経済人であり、生きた経済を知っていることでした。外交交渉でも、経済がからむと話が明瞭になります。妥協が生まれます。中国とのＬＴ貿易交渉がうまくいったのは、政治は松村謙三、経済は高碕と役割分担したからでしょう。松村は重厚な人格者で、アジア主義的な風格があり、周からも信頼されていましたが、まったくの経済オンチでした。むしろ経済、商売を軽く見ていたキライがあります。その点、高碕は商売人です。度胸があるだけでなく、経済を動かす勘どころも、こころ得ています。

実は中国は62年のあの時期、大躍進政策の失敗と3年続きの悪天候で、農村が崩壊状態になり、２０００万とも３０００万ともいわれる飢餓者を出す、危機的な時期でした。驚くべき数字です。ですから、日本からの肥料や人工繊維（ビニロン）の輸入は喫緊の課題でした。周はなんとしても日本との貿易をまとめる必要がありました。経済に明るい高碕は、周にとっても都合のいい交渉相手だったのです。

大器晩成という言葉がありますが、高碕は年をとればとるほど、大きな仕事をしています。50代の成功した罐詰屋さんだった高碕が、鮎川の要請で国策会社の満州重工業の経営を任されたのが最初の大きなステップでした。60歳のとき満州で敗戦を迎え、電源開発総裁を経て大臣になったのが70歳、先ほども述べたようにその年で1年生代議士になります。そこから、日ソ、日中、日米、さらにはアラブとの交流の先鞭をつけます。70代半ばになって、モスクワや北京やカイロに出かけるのは、骨だったでしょうが、ますます若く、元気になった、と周囲は見ていました。70代にもなって現役バリバリ、先頭にたつということは、「老害」とも言われかねませんが、高碕はほかに誰もできない成果を出しているのですから、文句のつけようはありません。

あまり知られていませんが、戦後日本の対アラブ外交の扉を開いたのも高碕でした。

バンドン会議では、周らアジア・アフリカの指導者と語り合っていますが、もっともウマが合ったのは、エジプトのナセル首相でした。ナセルはまだ30代後半、年齢は親子ほど違いますが、意気投合したのです。

高碕によると、会議の始まる前日、ホスト役のインドネシアのサストロアミジョヨ大統領に対し、この会議は初めてアジア・アフリカの首脳が一堂に集まる世界的な会議なのだから、意見の違いよりも合意を重んじるべきであり、そのためには決議は多数決ではなく、満場一致方式でやろう、と高碕が提唱したといいます。アメリカと安保条約を結んでいる日本としては、共産中国や中立国の提案する政治的な決議には賛成できず、そうなると、日本は孤立する。それを回避するために提案したのです。次回のアジア・アフリカ会議をカイロで開く意思を持ち、分裂を恐れるナセルは、すぐに高碕案に賛成します。以降、二人は会議中、食事を共にするなど、親交を深めました。

帰国後の通産大臣時代、高碕は日本アラブ協会の結成に協力しました。この組織は、ほとんど交流がなかった日本とアラブの窓口になり、のちに石油危機の時もパイプ役として大きな役割を担いました。

若手代議士の中曽根氏が中近東訪問の

際は、ナセル宛の高碕の紹介状を携えています。高碕もエジプトを2度訪問し、ナセルと旧交をあたためています。テーマは主に経済協力で、アスワンハイダムの建設も話し合われましたが、残念ながら借款条件で折り合えず、この大プロジェクトはソ連の手で行われました。これをきっかけに、ナセルは急速にソ連に傾斜していくのです。

高碕の生涯最後の海外訪問は、エジプトでした。ナセルとも会い、スエズ運河の工事をしている日本の建設会社の現場まで視察しています。亡くなる1年3か月前のことでした。

並外れた動物好き、というのも、高碕の大きな魅力でした。桁外れといっていい動物愛好家でした。とくに、あの獰猛なワニを深く愛して、自宅で飼っていたというから、びっくりします。訪れた客にワニを見せて驚かすのが、高碕の悪い趣味でした。

若いころ、カリフォルニア半島の孤島で、ワニなど野生の動物と親しんだのが、きっかけです。小ワニをよく連れて歩いたそうで、国境の税関では「好ましからざる動物」としてワニの携帯を拒否されたといいます。帰国してからも関西の自宅で飼っており、宝塚にあった動物園に大量に寄付しました。先ほどふれた弟さんは、一時、高碕一家と同居していたとき、よく、ワニのエサにするために近くの田んぼにカエルやヘビを取りにいかされたそうです。

ですから、ワニの飼育では日本の草分けです。九州・別府温泉の鬼山地獄にいるワニたちは、どうやら高碕の飼っていたワニと関係があるようです。伊豆・熱川のバナナワニ園のワニは輸入ものですが、高碕はしばしば訪ねてきて、ずかずか飼育室に入り、小ワニのしっぽをぶらさげて喜んでいました。

東京動物園協会の会長を死ぬまで務め、皇居のお堀に浮かぶハクチョウは、高碕の発案で生まれました。皇居前を魅力的にしよう、と宮内庁や丸の内の大企業に呼びかけ、ドイツ・ハンブルクのハーゲンベック動物園からハクチョウを輸入し、お堀に放したのが、動物園協会会長の高碕でした。いまも優雅に泳ぐハクチョウは、その子孫です。

こんな話もあります。

バンドン会議でインドネシアに行った折、会議の合間を縫って動物園に行き、オランウータンと出会いました。ぜひ日本にくれ、と交渉した結果、その年の暮れ、若い雌のオランウータンがスカルノ大統領の好意で送られてきました。のちにモリーと呼ばれるこのオランウータンは、クレヨンを持たせると絵を描くため「モリー画伯」として子どもたちに人気ものでした。上野動物園から多摩動物園に移ったモリーは、2011年3月の東日本大震災を機に食べ物を受け付けなくなり、地震の2か月後、59歳で絶命しました。飼育されたオランウータンとしては世界で最高齢だったそうです。

今、日中間は国交回復後で最悪と言われます。高碕や周のような、大局的観を持った人物が、いないのが残念です。こうした時期だからこそ、高碕の事跡を振り返る意味は小さくないと思います。

（2月14日・フォーラム）

講師略歴（まきむら　けんいちろう）

1951年　神奈川県生まれ
早稲田大学卒業、朝日新聞入社　校閲部、学芸部、AERA編集部などを経て現在 be編集部
著書　『獅子文六の二つの昭和』『日中をひらいた男―高碕達之助』など